第42回 札幌市PTA広報紙まつり 審査評

受賞おめでとうございます。今回も甲乙つけ難い作品ばかりでした。審査委員一同、①ＰＴＡ活動の紹介②企画性・アイディア③全体（見やすさ・読みやすさ）のバランス、３つの観点で審査しました。

■「令和初の広報紙まつり」、「表紙」で読み手の心をつかみ、次のページへ…

広報紙を手にした時、『表紙』には目次がはっきり書かれ、どの特集か理解できました。ＷＥＢ上で全国の優秀作品を見ても、やはり、目次には大きく「〇〇特集」と書かれ、一目瞭然、わかるのです。

ＰＴＡ広報紙も読み物です。書籍・雑誌と同様、表紙や見出しで読者の心をつかむことが第一歩です。表紙・教職員紹介コーナー、記事には、額を手に持つ令和スタイルが随所に登場。また、教職員の幼少期の顔写真クイズの表紙や左半分が校舎写真、右半分が広報部員作成のイラストという表紙もありました。目次部分をチョークで「黒板」に書いた表紙は、アナログ感覚とデジタル感覚の融合ともいうべき、ユニークな発想でした。地域の「歴史特集」、給食などの「食育特集」、すごろくを使っての「学校防災特集」、子どもたちと保護者の意識を対比させたアンケート特集など、随所に工夫が満載でした。

■「取材・調査」して「活用する広報紙」へ変身。具体的な「主張」がありました

①　<u>基本は、「取材」を通しての記事づくりです</u>

道徳科・外国語教育・プログラミング教育などの新しい教育活動から子ども関連の社会問題など、多面的・多角的に取り上げている作品、さらに学級懇談会や家庭団らんで話題にする「活用する広報紙」に迫っている作品もあり、審査委員の高い評価が付きました。

取材を通して読み手の興味をひく特集や記事づくりは広報紙づくりの醍醐味です。編集会議で取材分担、計画を立てて具体的に取材、写真を撮り、調査・分析・記事に…という手順を大切にしている作品も数多くありました。企画段階で取材の意図を明らかにし、密な意見交換から紙面づくりを工夫してきた様子が読み取れます。やはり、汗して取材した記事・特集には思わず引き込まれました。

特集記事は作品の中核、まさに顔となるものです。学校独自の創意工夫があり、学校の周年記念行事や教育活動、また世相や子ども関連の出来事をタイムリーに取り上げている好事例も数多くありました。その中で、事実をありのままに記事にするだけでなく、取り上げた特集から考えてもらいたいこと、訴えたいことなどを具体的に主張している例もあり、大変すばらしい作品でした。

②　<u>問いかけると読み手は考えます</u>

読み手と近い距離感を醸し出す『問いかけ』も有効でした。解説記事から読み手に『問いかけ』を入れるなど、一方通行にならない工夫がありました。ビジュアル重視で写真に短いコメント付きより「取材→分析→主張」の記事は読み応えがあります。ＰＴＡ活動を時系列にまとめる記事、消防や交通安全指導関連、避難場所など災害や安全・安心の特集記事につなげている作品にも私は着目しました。教職員紹介コーナーがいまだに多いのは、読み手の期待の高さと編集のしやすさだと思います。

教職員の好きなこと、性格・特技などを星の数で回答してもらい、織田信長度☆５つ、家電・ホームセンターマニアレベル☆５つなど、思わず読んでいてクスッと笑えるユーモア企画もありました。

■「編集後記」の思いを新旧担当者で引き継いでください

従来の教職員紹介・子どもアンケートを見直し、「子どもたちの声を広報紙に！」「子どもと保護者が一緒に楽しめる広報紙を！」という編集後記を見て、私は広報づくりの原点を見ました。

ある作品には、担当者が「６人でも出来た！」と、「黒板に書いた編集後記」を写真で撮り、掲載しました。ユニークなアイディアに脱帽です。私の経験では、第１回の広報担当の集まりに、新旧の担当者が集まり、しっかりと引き継ぎしていた姿を目にしておりました。広報担当者の思いを記録に残し、作成経過を「次の担当者に引き継ぐ場」を設け、伝統としてつなぎたいものです。

ご応募いただいたすべての広報担当の皆様、また、これまでご尽力いただいた札幌市ＰＴＡ協議会役員・事務局並びに広報委員会の皆様に心より感謝申し上げます。

審査委員長　村上　直史（北海道通信社　参与）